

行雲舎の本棚から その6

9月も後半に入り、日増しに秋の気配が深まってきました。図書室のある古民家ゲストハウス・行雲舎です。約2000冊の蔵書の中から、気になる本やお勧めの本を紹介します。

「行雲舎の本棚から」の6回目は、映画の公開が間近に迫る風良ゆう原作「汝、星のごとく」を取り上げました。2023年の本屋大賞を受賞し、瀬戸内を舞台にした小説ということで注目しましたが、感動的な作品なので、ぜひ読んでいただきたい一冊です。今回は続編の「星を編む」、そして小説のタイトルのヒントとなった佐藤春夫の「春夫詩抄」も紹介します。

『汝、星のごとく』 風良ゆう 著

風光明媚の瀬戸内の島で出会った高校生の男女が複雑な家庭環境や孤独感ゆえにひかれ合いながらも、すれ違う切ない恋愛物語です。しかし単なる恋愛小説ではなく、家族のあり方や女性の自立を考えさせられる、多様な読み方ができる作品です。

ロケ地となった今治市では、この夏の花火大会に主演の俳優横浜流星さんと広瀬すずさんがサプライズで登場しました。また、今治市役所で映画のシーンをパネル展示するなど、映画公開を街全体で盛り上げています。

本書の内容（要約）

瀬戸内の島で育った主人公の暁海と櫛は、互いの孤独に触れ合うようにひかれ合いながらも、島の閉塞感や家庭の事情で長い年月すれ違い続ける。母の依存と借金に縛られた暁海は、逃れたいのに離れられない島で、自分の力で生きる術を探し、少しずつ自立の道を進んでいきます。高校の恩師である北原先生の静かな誠実さと、父の不倫相手・瞳子の凜とした生き方は、暁海に「自分の人生を選ぶ」という感覚を呼び起こさせます。成長し、経済的にも精神的にも自立した暁海は15年の歳月を経て再会した櫛と向き合い、彼の最期を見届けます。

印象に残った一節

パートナーがいてもいなくても、子供がいてもいなくても、自分の足で立てること。それは自分を守るためでもあり、自分の弱さを誰かに肩代わりさせないということでもある。人は群れで生きる動物だけど、助け合いと依存は違うから一。（32歳になった暁海の思いを吐露した一節）

読後の感想

本屋大賞受賞をきっかけに、瀬戸内が舞台ということもあって購入し、今回の映画公開をきっかけに、あらためて読み返しました。

暁海と櫛が住む島では、すぐに噂が広まったり周囲の目を気にしながら生活したりする閉そく感とそれに抗いたい気持ちは、若かったころの自らの経験を思いだし、共感しながら読みました。恋愛小説はあまり読みませんが、孤独を抱えてひかれあいながら、すれ違う櫛と暁海の切ないラブストーリーに、一気に引き込まれました。

15年の歳月を経た櫛との再会は、互いが自立したうえで向き合う「成熟した愛」に気づく瞬間として描かれています。そして、暁海が櫛の最期を見届ける場面は、悲しみだけでなく、彼女が自分の人生を選び取った証として、静かな強さを帯びています。この物語は、環境に縛られた人生から抜け出し、自分の生き方を選ぶ勇気を描いた、恋愛小説の枠を超えて、読む者の心に長く残る余韻を持つ作品だと感じました。

2人を取り巻く登場人物たちの家族関係やヤングケアラーやLGBTQ（性的少数者）、SNSによる炎上など現代の社会的な問題も巧みに描かれ、深く考えさせられました。

『星を編む』 凧良ゆう 著

要約と読後の感想

「汝、星のごとく」の続編（スピンオフ）として、暁海や北原先生、2人の櫛の担当編集者のその後を描いています。北原先生の過去、櫛の小説が残されていく過程、暁海が喪失のあとをどう生きるかーの3編に分かれています。

「汝、星のごとく」では、北原先生は成熟したものわけりのよい大人として登場しますが、その過去には両親との葛藤や1人娘の出生の秘密など複雑な事情が隠されていました。また、2人の担当編集者もそれぞれ仕事と家庭の間で悩んだり、過去の失敗に苦しんだりしながら、櫛の小説や漫画の復刊に情熱を注ぎます。

3編の中ではやはり、櫛を失った暁海のその後の人生に興味をひかれます。暁海は北原先生との結婚生活を続けながら、刺繍作家としても成功します。しかし、櫛を忘れず、忘れないまま、前へ進んでいきます。その生き方は、大切な人を失ってどう生きていくかを教えてくれている気がします。

『春夫詩抄』 佐藤春夫作

映画公開に合わせて、「汝、星のごとく」の関連本を集めた書店のコーナーで、見つけました。

帯文には風良ゆうさんの推薦の言葉として「出会うべきときに、出会うべき言葉に出会ったのだと思います。『汝、星のごとく』というタイトルは、佐藤春夫さんの「夕づつを見て」の一節からお借りしました。（中略） この詩があったからこそ、『汝、星のごとく』が生まれたのかもしれませんが。孤独で切なく、けれど清らかな印象を持つ詩です」と書かれています。

「夕づつを見て」

きよく

かがやかに

たかく

ただひとりに

なんぢ

ほしのごとく

